

平野秀吉の遺墨と落款の特徴

—— 小泉孝旧蔵品を中心に ——

横田 善 衛

一. はじめに

平野秀吉はこの数年来の調査研究により、教育者、国文学者、校歌作词者、登山家としての業績の一端があきらかになりつつある。¹²³⁴⁵⁶その業績等が明らかになるのとは対照的に、平野秀吉の遺墨は極めて少なく、遺墨の調査研究が進んでいないのも自明のことである。⁷ま

- 1 横田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会会報2013, pp.48-59。
- 2 横田善衛「会津八一と恩師平野秀吉」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会会報2014, pp.31-44。
- 3 横田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、前掲2, pp.45-52。
- 4 横田善衛「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十八号』越佐文人研究会2015, pp.153-173。
- 5 横田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十九号』越佐文人研究会2016, pp.146-163。
- 6 横田善衛「平野秀吉が記した「榮光帖」と『日本アルプス登山案内記』発行に伴う登山家高頭仁兵衛・大平晟・横有恒との交流を明らかにする」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第二十二号』越佐文人研究会2019, pp.173-195。
- 7 横田善衛「平野秀吉の生家および墓の所在と遺墨について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第二十号』越佐文人研究会2017, pp.87-93。

た平野秀吉は新潟県尋常中学校の助教諭であった、一八九八（明治三十一）年六月三日に、文検（中等学校教員資格取得のための文部省検定試験の略称、合格すると尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の教員になることができる資格試験、以下「文検」とする）で漢文科と習字科に合格していることから、書家としての素養を身に付けていたと考えられる。

こうした状況にあるところ、二〇一九（令和元）年十二月十三日の消印で、小泉孝の親族から次の封書が届いた。

今年も残すところ僅かになりました。

（略）

年初より家に有るもので少しでも横田さんのお役に立てるものはないか？と探してみました。雑多に送りました。

（略）

この封書の到着と時を同じくして、小泉孝旧蔵の資料数点が筆者宅に届いた。小泉孝は『巻町双書 第十七集 平野秀吉』（以下、『平野秀吉』とする）を著し、平野秀吉研究の第一人者として知られた人物である。これまで小泉孝の人となりを知る手掛かりに乏しく、人となりを知ることができなかったが、このたび小泉孝の履歴を記した資料を入手することができた。

そのため本研究では、『平野秀吉』を著した小泉孝の人となりを明

8 前掲2, p.34, 44。

9 小泉孝『巻町双書 第十七集 平野秀吉』巻町役場, 1971, 94p。

らかにするとともに、平野秀吉関連資料の整理を行い、明らかとなった事項をまとめることで、平野秀吉の人物史研究の進展に寄与することを目的とする。また本資料には、平野秀吉の遺墨が数点含まれており、遺墨の落款に注目することで、これまで明らかにされることがなかった平野秀吉の落款の特徴を明らかにできると考えている。

二、小泉孝の人となり

はじめに、平野秀吉と小泉孝との関係について示したい。小泉孝は『平野秀吉』¹⁰の「あとがき」に、「平野先生は恩師であり、私たちの媒酌人であり、三人の子どもたちの名付親」であると著してあることから、小泉は平野秀吉を敬愛し、平野の人となりを知る、身近な人物であるといえる。そこで小泉孝の人となりを示したい。小泉孝の人となりはこれまで『平野秀吉』の奥付に記された履歴をたよりにするしかなかった。しかしながら、これまで一般に公開されることがなかった履歴書等の資料提供を、小泉孝の親族から受けることができた。そこで『平野秀吉』奥付にある既知の小泉孝の履歴を示すとともに、提供資料に基づく履歴を示し、小泉孝の人となりを明らかにする。

(ア) 『平野秀吉』¹¹による履歴

〔一九七二（昭和四十六）年十一月一日〕。

11 前掲9p.94。
前掲9（奥付）。

生年月日 明治四十二年¹²一月二十四日

学歴 高田師範学校本科一部卒（昭和三¹³・三）

職歴 高田師範学校専攻科卒（昭和七¹⁴・三）

三島郡寺泊町寺泊尋常高等小学校訓導

高田市戸野目尋常高等小学校訓導、教頭

東頸城郡牧村沖見小学校長

新大教育学部付属高田小学校教頭

新潟県教育委員会指導主事

高田市大手町小学校長

高田市大町小学校長（昭和四二¹⁵・三退職）

元県小学校長会長

高田市教育委員長

現上越市教育委員

高田文化協会会長

研究 集団学習と個別学習の実践研究
学校保健等

(イ) 『小泉孝先生県知事表彰 教育・文化功労賞』¹⁶による履歴

〔一九七六（昭和五十一）年十一月三十一日〕。

12 西暦一九〇九年。

13 西暦一九二八年。

14 西暦一九三二年。

15 西暦一九六七年。

16 公孫会高田支部『小泉孝先生県知事表彰 教育・文化功労賞』公孫会高田支部、1976.4p。

小泉孝先生略歴¹⁷

- 昭 三 (一九二八) ・ 三 高田師範学校本科一部卒業
 昭 三 (一九二八) ・ 四 三島郡寺泊尋常高等小学校訓導
 昭 四 (一九二九) ・ 四 高田歩兵第三十連隊短期現役兵
 トシテ入隊
 昭 七 (一九三二) ・ 三 高田師範学校専攻科卒業
 昭 七 (一九三二) ・ 三 中頸城郡戸野目尋常高等小学校
 訓導
 昭二十一 (一九四六) ・ 三 同 教頭¹⁸
 昭二十四 (一九四九) ・ 三 東頸城郡沖見小学校長
 昭二十七 (一九五二) ・ 十一 新潟大学教育学部附属高田小学校
 教頭
 昭三十一 (一九五六) ・ 七 新潟県教育委員会指導主事
 昭三十六 (一九六一) ・ 四 高田市立大手町小学校長
 昭三十九 (一九六四) ・ 四 高田市社会教育委員
 昭四十 (一九六五) ・ 四 高田市立大町小学校長
 昭四十 (一九六五) ・ 四 新潟県社会教育委員
 昭四十一 (一九六六) ・ 四 新潟県小学校長会長、
 全国連合小学校長会理事
 昭四十二 (一九六七) ・ 三 退職
 昭四十四 (一九六九) ・ 十 高田市教育委員、教育委員長
 昭四十五 (一九七〇) ・ 五 上越文化協会会長

昭四十六 (一九七二) ・ 四 上越市教育委員、教育委員長
 ご功績

○ 教育者として

日常生活に對しては教師としての厳しさをもちながら、他に對する豊かな温かさと包容力によつて、多くの人々の敬慕をあつめておられます。

教育一筋に生きる盛んな情熱は、その研究の深さ、質の高さと共に周囲に大きな影響を与えられました。また、常にざん新たな感覚をもつて教育の動向を考究し、全職責のそれぞれの場において、地域教育界に様々な教育研究会や協議会を組織し、その推進の中核として活躍されました。

○ 上越文化協会会長として

・ 万葉及び俳句研究を契機として、早くから上越地域の文化活動に關心を寄せられ、協力と推進の先頭に立つてこられました。

昭和三十八年¹⁹、上越文化協会に加入し、四十年²⁰以来その常任理事として活躍されました。

・ 昭和四十五年²¹会長に就任以来、文学關係にとどまらず、上越地域の文化に關係した様々な顕彰碑の建立、展覧会の開催、郷土關係作家及び小川未明会童話作家と盛んな交流、郷土文芸誌「文芸たかだ」の一〇〇号までの発行など、多彩な

18 17

文中の()内の西暦は筆者が加筆したもので資料には記載がない。
 中頸城郡戸野目国民学校の誤り。

21 20 19

西曆一九六三年。
 西曆一九六五年。
 西曆一九七〇年。

文化的事業の継続開催に努め、郷土文化の向上に多大な貢献をされました。

現在もなおその任にあり、誠実に活躍を続けて、地域住民のあつい信望を受けておられます。

○ 著書・論文

・健康教育に関する論文 文部省主催 一位入賞

小学館主催 一位入賞

新潟県主催 一位入賞

・平野秀吉

・農村社会におけるコミュニティースクール

・沖見の教育 他

(ウ) 『前会長小泉孝 追想弔慰集』²²による履歴

(一九七七(昭和五十四)年六月十六日)。

(略) 之は昭和五十四年四月に小泉氏が「勲五等双光旭日章」を授与された栄誉を称え、同年六月十六日に、上越市本町六丁目 高田館で催された祝賀記念式典の際、参列者に配布された略歴書の写しです。(略)

小泉孝先生の略歴(写)²³

昭和 三(一九二八)年四月 三島郡寺泊尋常高等小学校訓

導・兵役

高田師範学校専攻科卒

昭和 七(一九三二)年四月 中頸城郡津有村立戸野目尋常

高等小学校訓導

・児童生徒の保健活動を推進し、学校が健康教育文部大臣表彰を受ける主軸となった。

・「児童の健康教育」についての教育論文が、全国一等当選となる。

・全国初の地域学校児童対象核予防BCG接種を継続実施する。

・県下初の、映写幾購入による視聴覚教育の推進をはかり、戦前、戦後を通じての上越地方視聴覚教育の振興に貢献する。

昭和二十一(一九四六)年四月 中頸城郡津有村立戸野目国民

学校教頭

昭和二十四(一九四九)年四月 東頸城郡沖見村立沖見小学校

長となる。

・当時の県下には稀な学校図書館をへき地校に設置し、また「沖見の子ども」「山なか、田どころ」などの副読本を出版し、郷土学習のあり方を研究する。

・変動期におけるへき地カリキュラム作成に着目し、郡の組織を作り指導計画を完成する。

昭和二十七(一九五二)年十月 新大教育学部附属高田小学校

教頭

国語研究組織の確立に努力する。

²² 保坂平治「小泉氏の略歴について」光昭会東京支部『平成五年五月前

会長小泉孝 追想弔慰集』光昭会東京支部1997,pp.39-40。

²³ 文中の(一)内の西暦は筆者が加筆したもので資料には記載がない。

昭和三十一年（一九五六）年七月 新潟県教育委員会指導主事

・地域の学校教育のあり方を指導し、教育行政に貢献する。

昭和三十六（一九六一）年四月 高田市立大手町小学校長となる。

上越国語教育連絡協議会の創設に努力し、四十年四月より会長を勤め全国的に研究の交流を図り、各地において研究発表会を推進する。

・「創造性を培う知的能力の開発」で学研教育賞を受けるなど経営手腕は広く、他の指標と認められた。

昭和四十（一九六五）年四月 高田市立大町小学校長

・全国連合小学校長会理事

・新潟県小学校長会会長

・新潟県社会教育委員

・新潟県小学校教育研究会会長

昭和四十二（一九六七）年三月 退職

昭和四十二（一九六七）年十月 新潟県教育委員会より、教育

功労者として表彰をうける。

昭和四十四（一九六九）年十月 高田市教育委員、続いて教育

委員長となる。

昭和四十五（一九七〇）年五月 上越文化協会会長をつとめる。

・郷土出身作家小川未明、小田嶽夫等の顕彰碑の確立、展覧会、文化講座の開催、文芸誌「文芸たかだ」の発行など、郷土文化の向上に貢献する。

昭和四十七（一九七二）年七月 上越市教育委員長となる。

・高田・直江津両市合併に伴う教育行政の確立発展に貢献

する。

昭和五十（一九七五）年十一月 教育文化功労者として、県知

事表彰をうける。

昭和五十四（一九七九）年四月 勲五等双光旭章を授与させる。

これまで述べてきたように、履歴については（ア）（イ）（ウ）の三種類が存在する。調査を進めるうちに、小泉孝が新潟県知事被表彰者として推薦される際の書類（履歴書・身分調書・功績調書）が存在し、その原本（写し）を確認することができた（表1）。推薦される際の書類（履歴書・功績調書）には、小泉孝六十六才と記されていることから、一九五七（昭和五十）年一月二十四日から一九五八（昭和五十一）年一月二十三日の間に、まとめられたものと推察される。この履歴書ならびに功績調書が小泉孝の履歴（教育業績）の中で最も詳しい。これによると小泉孝は、「小学校訓導」「小学校教頭」「へき地小学校長」「県指導主事」「上越中心小学校長」「教育委員及び教育委員長」「上越文化協会会長」と年代や職位の変化に伴い、多くの教育業績を残していることが明らかとなった。また小泉孝には、「小学校訓導」時代に取り組んだ「健康教育」を二十数年後に振り返りまとめた「最初の教育研究」²⁴や、児童結核の予防処置として施されたツベルクリン反応検査およびBCGワクチンの予防接種と、予防処置が児童の心情に与えた影響をまとめた研究論文「國民學校における結核調査」²⁵がある。

²⁴ 小泉孝「最初の研究 樋口君と私―「健康教育」をめぐる―」、田島

三四彦『教育創造』第8巻第3号、高田教育研究会、1955、pp.23-24。

²⁵ 小泉孝「國民における結核調査」、三宅鑛一『學校衛生』第22巻第7号、帝國學校衛生會、1942、pp.14-27。

る。さらに小泉孝には、研究主題「算数における書かれた問題の指導」と定めた牧小学校的取り組み「指定校めぐり 東頸・巻小学校的巻」や、一九五〇（昭和二十五）年に発足した視聴覚教育研究会の活動内容²⁶、「県指導主事」時代にまとめた「現場の問題―指導をめぐって―」²⁷、「これからの学校行事―その基本的な考え方―」²⁸と題する論考、「授業の昔と今」²⁹など多数の著作が存在することも明らかとなった。

このことから小泉孝は、新潟県の教育界のみならず、全国的に認められた学校教育者、学校経営者、社会教育者であったといえる。

三．資料の概要

提供された資料は書籍五冊、掛軸三巻、短冊一枚の合計九つである。それぞれの資料番号として（一）から（九）を付したい。

（一）書籍「小泉孝著『巻町双書 第十七集 平野秀吉』巻町役場、一九七一（昭和四十六）年十一月一日刊行、九十四頁」（前述の『平野秀吉』をいう）一冊。

（二）書籍「平野秀吉著『巻町双書 第二十八集 全釋万葉集昭和略解 総論 卷一 卷二』巻町・潟東村教育委員会、一九八〇（昭和

²⁶ 小泉孝「視聴覚教育研究会」、石倉宗一『教育創造』第5巻第11・12号、高田教育研究会、1952、p.56。

²⁷ 小泉孝「現場の問題―指導をめぐって―」、田島三四彦『教育創造』第12巻第1・2号、高田教育研究会、1959、pp.1-5。

²⁸ 小泉孝「これからの学校行事―その基本的な考え方―」、田島三四彦『教育創造』季刊第4号、高田教育研究会、1960、pp.1-4。

²⁹ 小泉孝「授業の昔と今」、矢野孝二『教育創造』季刊第35号、高田教育研究会、1968、pp.31-36。

五十五）年三月三十一日発行、三九三頁」一冊。

（三）書籍「平野秀吉著『巻町双書 第二十九集 全釋万葉集昭和略解 卷三』巻町・潟東村教育委員会、一九八一（昭和五十六）年三月二十一日発行、二五一頁」一冊。

（四）書籍「平野秀吉著『山嶽歌集 駒くさ』斯文書院、一九二八（昭和三年十月二十日発行、一四六頁）（以下、『駒くさ』とする）一冊。

（五）書籍「平野秀吉著『山嶽の歌 第二集 高嶺いばら』木曜会、一九三九（昭和十四）年六月十日発行、二八八頁」（以下、『高嶺いばら』とする）一冊。

（六）掛軸「ひんか羅となくは何鳥梅のきの 原生林をすきて空三累」一巻。（図1、2）

（七）掛軸「穂高嶽をよめる歌竝にみじか歌」一巻。（図3、4）

（八）掛軸「高ね薔薇美な上む支て日さかりの やま一山をさきみてるかも」一巻。（図5、6）

（九）短冊「小泉君の記念日に所感を 天道をつひ尔是なりと陳蔡の 野天うゑ多里し孔子にてあり公里」一枚。（図7）

四．資料の解説

九つの資料について解説を加える。なお（一）から（九）は前述の数字と対応する。

（一）の奥付頁に「万年筆で著された手紙一通が挟まれており、次のおり読み取ることができた（図8、9）」³⁰。

³⁰ 宛名は筆者が省略した。

私たちが

大變御厄介になつた平野秀吉先生の

伝記？ができましたのでお届け

します

偉大な人の姿を十分表現し

得ないのは自分の不敏のいたすところ

ですがよき人の生き方を参考

にして下さい

十一月十四日

小泉 孝

(省略) 様

(省略) 様

小泉孝は『平野秀吉』に手紙を添えて、親族に送付したものと推察される。そのため、手紙の差出年は、『平野秀吉』が発行された、一九七一(昭和四十六)年と考えてよい。

(二)から(五)はすべて平野秀吉の著書であり、小泉孝が所蔵しているのは当然のことと考える。(五)は鉛筆や万年筆等で加筆訂正した箇所が多数散見され、小泉孝が『平野秀吉』を著す上で参考資料としたことが推察される。また(五)の最初の頁には「数里入雲峰 秀吉」との墨書が見られる(図10)。

(六)は『駒くさ』二二六頁に掲載された短歌であり、『駒くさ』には次のとおり記されている。

ヒンカラと啼くは何鳥、なにどり 榎つがの木の原生林を透すきて空見る。

(大意) ビンガラと啼いている鳥は何鳥であろうか。榎の木の原生林の間から、透き通つた空が見える。

本歌は「夏雪草」短歌五十三首のうちの一詩であり、「夏雪草」の注には、「常念山脈より槍が岳へ 乗鞍嶽より御嶽へ 御嶽より木曾駒が嶽へ 八つ嶽・浅間山などくさぐさの山」とある。さらに本歌の注に「乗鞍へ」とあることから、乗鞍嶽に向かう途中に詠まれたものと推察される。

(七)は次のとおり釈文することができる。

穂高嶽をよめる歌なごひ竝にみじか歌

山あれは こはきものかも

天てんさけぬ 大地だいちひしげぬ

山あれて 三日みかつゞきけり

ひしがれて さげのこる柱

くえはげて おちかゝる壁

槍がすま衾 穂高山なみ

前穂たか 奥西穂たか

北ほ高 唐沢からさわ大喰おほほみ

一万尺を 五里にわたりて

晴るる日も 飛驒の夕日は

をねこえて 信濃へささず

くもる日も しなのさ霧

谷こして ひだへ吹かぬなり

三日あれし 山けさはれて
 黒にびの 稜威の岩山
 穂高の 八十村山は
 サファア色の コバルト色の
 大空の 天のみ中に
 いやなみたつも
 空沢を いしながれつゝ
 このよきそらを とぶ鳥もなし

奥穂高

出典は『駒くさ』五六から五九頁に掲載された長歌や短歌であり、『駒くさ』には次のとおり記されている。

穂高嶽をよめる歌一首並びに短歌
 山荒れは こはきものかも
 天裂けぬ 大地ひしげぬ
 山荒れて 三日續きけり
 ひしがれて 裂けのこる柱
 崩え剥けて 落ちかかる壁
 槍ぶすま 穂高山なみ
 前穂高 奥、西穂高
 北穂高 溜澤、大喰
 一萬尺を 五里に亘りて
 晴るる日も 飛弾の夕日は
 尾根こえて 信濃へささず
 曇る日も 信濃の霧は

谷こして 飛弾へ吹かずとふ
 三日荒れし 山今朝霽れて
 黒鈍の 稜威の岩山
 穂高の 八十群山は
 サファア色の コバルト色の
 大空の 天のみ中に
 いやなみたつも
 空谷を 石流れつつ
 此のよき空を 飛ぶ鳥も無し

奥穂高

『駒くさ』に掲載された長歌や短歌と、掛軸に揮毫された長歌や短歌では、漢字や仮名遣いなどいくつかの点で異なることに気がついた。そのため変更点がどれくらいあるのかについて、調査することとした。その結果、『駒くさ』では漢字であった言葉が、掛軸では平仮名に変更されていた場合（前述二重線）が二五か所、『駒くさ』では平仮名であった言葉が、掛軸では漢字に変更されていた場合（前述二重線）が二か所、『駒くさ』と掛軸とで異なる漢字を用いていた場合（前述波線）が二か所あった。さらに、言葉そのものが変更されていた場合（前述太文字）が二か所見つかった。

このことから、平野秀吉は『駒くさ』に掲載した長歌や短歌を揮毫する際に、自らの詩歌を推敲し変更を加えるとともに、漢字の意味にとらわれず多様な解釈が可能な平仮名を、あえて用いる傾向にあることが明らかとなった。

また資料の中には、「五十周年記念 平野秀吉先生遺墨 長歌 光昭会」と記された色紙入れ（図11）があり、色紙入れの中には、平野

秀吉の履歴(図12)と、(七)の掛軸「穂高嶽をよめる歌竝にみじか歌」の複写紙本(図13)、さらにはその釈文解説紙(図14)が納められていた。小泉孝は自身が所蔵する平野秀吉の遺墨を、光昭会³¹の周年記念品として頒布したことも本調査から明らかにすることができた。

(八)は『高嶺いばら』二六〇頁に掲載された短歌であり、『高嶺いばら』には次のとおり記されている。

高嶺いばらみな上むきて、日盛りの山一山を咲き盈てるかも。

(大意) はげしく日の照りつける山、その一山全体に、タカネバラはみんな上を向いて咲き誇っていることよ。

(注) 「日盛り」は「(夏などの) はげしく日の照りつける盛り」の意³²。

「かも」は詠嘆・感動の意を表し、「・であることよ」と訳す³³。

本歌は「暗」四十五首のうちの一首であり、『高嶺いばら』では「高嶺いばら」と六文字であるが、掛軸は「高嶺薔薇」と五文字である。

31 大島良作が「大正十三年四月、高田師範学校に入学、(略)。卒業後光昭会が生まれ、(略)。(小泉孝が)やがて自然に光昭会の会長として私共のリーダーとなり」と記していることから、光昭会は高田師範学校同期卒業生の会であることが明らかとなった。[前掲22, pp.13-14]。

32 松村明ら『古語辞典』旺文社, 1988, p.1001。

33 前掲32, p.329。

る。『日本の野生植物 木本』³⁴によれば、和名はタカネバラ(学名: *Rosa nipponensis*)といい、「托葉は葉柄に沿着する。花柱は離性、萼筒の喉部からわずかにでて喉部をふさぐ。花は大きく、径3.5cm以上、紅紫色または淡紅色。果実(萼筒)には刺がない。萼裂片は狭披針形で伸張し、花時に反曲し、果時には直立して宿存する。小葉は5から9個。枝は無毛、またはほぼ無毛。茎には細い刺針があり、刺針は徒長枝には多いが、のちに脱落し、側枝には少ない。刺自体も無毛。花は径3.5から5cm、紫紅色。果実は倒卵状紡錘形、長さ1.5から2cm。小花柄は長く、長さ3から5cmで腺がある。小葉は7から9個、長楕円形、円頭で薄く、長さ2から3.5cm、幅は狭く1から1.7cm、鋸歯は細くて、数が多い。小花柄にはやや長い腺がある。」との形態分類学的な特徴をもつ。「落葉低木。本州(尾瀬)中部高山・四国(剣山)」に分布し、別名はタカネイバラという。平野秀吉はこの日本特産の高山性のバラを愛好したといえる。

(九)は「小泉君の記念日に所感を」とあることから、平野秀吉が小泉孝の記念日に贈った和歌(短冊)である。

天道をつひ尔是なりと陳蔡の野天うゑ多里し孔子にてあり

(大意) 天地自然の法則は(遂に)これだと信じ行動している小泉君は孔子が陳蔡で食糧難に苦しんだのと同じように、露天で飢え苦しんでいる(孔子の)ようだ。

34 佐竹義輔ら『フィールド版 日本の野生植物 木本』平凡社, 1999, pp.62-64。

(注) 「天道」は「天地自然の法則。宇宙の道理。」の意³⁵。

「陳蔡」の典故は『論語』。具体的には「陳は今の河南省の中部にあつた小国。蔡はその南の国。孔子はその流浪の途中、この辺りで食料も途絶えて苦しんだ。(孔子が)六十四歳のとき」³⁶という。

「野天」は「屋根のない所。露天。」の意³⁷。

本歌は小泉孝の苦境を、孔子が体験した陳蔡の故事になぞらえて詠まれたものと推察される。

五. その他の資料の概要および解説

(ア) 小泉孝による平野秀吉遺稿等の差配

平野秀吉の遺墨調査の過程で、小泉孝が平野秀吉の遺稿等の差配に大きく関与していることをうかがわせる手紙(封書、万年筆)を発見したので、次に紹介する。一九八一(昭和五十六)年十月二十日の消印で、小泉孝が石山与五栄門(巻町郷土資料館³⁸館長)に宛てた手紙(新潟市巻郷土資料館蔵)である(図15、16、17)³⁹。

先般平野先生の件につき、御好意こもる御電話を

³⁵ 金田一春彦『学研現代新国語辞典改訂第三版』学習研究社2002、p.909。

³⁶ 金谷治『論語』岩波書店1999、p.202。

³⁷ 前掲35、p.1030。

³⁸ 現在、新潟市巻郷土資料館(新潟市西蒲区)。

³⁹ 「手紙は小泉孝の筆ではなく、母ユキの手によるものです。理由は父の筆跡とは異なるからです。父孝は日常的に母ユキに代筆を依頼。ユキが文章をまとめ清書、投函していました。」とご令嬢不盡子から連絡を頂いた。(令和二年八月十日(月)筆者聞き取る)。

頂きありがとうございます。その折、明確な回答もせず失礼いたしました。

過日、江端⁴⁰様から御書面を頂き、その中に、貴殿と、平野先生の原稿・胸像の件⁴¹などにつき話し合われた折の御所見をお寄せ下さいました。

江端様へは大変遅くなりましたが、次のように御返信いたしました。

① 原稿保管について

国立国文学資料館への寄付採納は最後の最後の

こととし、出来るかぎり民間から出版し、社会に聞きたい。保存上から考えると公の機関で保管した方が望ましい。

そのような観点から巻町に保存願ひ、出版を考えていただければ、先生も喜ばれると思っております。

② 胸像について

高田分校の敷地が上越教育大学に移管となり、胸像の撤去・移転の話が出たが、交渉の結果、現

地点に存置できることとなった。もしもの時は城址公園を考えている。しかし、巻町のみなさまの温情に甘える事

態になるかもしれない。その時はよろしく願ひしたいということ。

以上簡畧に記しましたが、今後とも江端様と御相談

⁴⁰ 江端一郎。一九一四(大正三)年生まれ。巻町助役・巻町教育長を歴任し、二代巻町の町長就任。町長在任は一九六六(昭和四十一)年八月から一九七四(昭和四十九)年まで。巻町良寛会初代会長。(江端一郎『つれづれに 良寛余話』考古堂2004.154p(奥付))。

下されまして、平野先生の顕彰に御盡力賜りたく、切に
お願いいたします。

御連絡遅くなり申し訳ありません。

向寒の折から御自愛專一に御過ごし下さい

十月二十日

小泉 孝

石山 与五栄門 様

この手紙の文面から、一九八一（昭和五十六）年十月二十日の時点
で次の二点が決定していたことが明らかとなった。①平野秀吉の『全
釋萬葉集昭和略解』の遺稿は巻町での保管を最優先し、出版を進める。
国文学研究資料館⁴¹への寄付採納⁴²は最終手段とする。②平野秀吉の
胸像は上越教育大学に移管後も存置できる。もしもの時は城址公園に
設置する。①②について、小泉孝は江端一郎や石山与五栄門と緊密な
連絡を取りながら進めていたことが明らかとなった。

(イ) 平野秀吉の新たな遺墨の発見

調査を進めている過程で、新たな遺墨を発見した。『巻郷土資料館
資料目録No.6平野秀吉資料目録』に記載のない遺墨である。遺墨は掛
軸一卷であり、「岩は多か男やまめう可う那具はし幾 め山久呂比免
樹山は南やま」と釈読することができる(図18、19)。本歌は『高嶺
いばら』二一〇頁に掲載された短歌であり、『高嶺いばら』には「岩
はだか、男山妙高。名ぐはしき女山黒姫、樹山花やま。」とある。本
歌は「蓮華つつじ」短歌十九首のうちの一首であり、「蓮華つつじ」
の注には、「黒姫山の歌十數首。此の山信越の境に聳ゆるいと好き山、
年ごとに幾たびとなく來りのぼりぬ。」とあることから、蓮華つつじ
で彩られた黒姫山を女山に見立て、歌に詠んだものと推察される。こ
の掛軸には専用の収納箱(桐箱)があり、蓋天板には「平野秀吉和歌
一首」と墨書され(図20)、蓋の裏面には「加藤儂一敬題印」と記さ
れている(図21)。

六・平野秀吉先生顕彰展の遺墨発見

遺墨を記した資料『巻郷土資料館資料目録No.6平野秀吉資料目録』
(以下、『平野秀吉資料目録』とする)を参考に、本資料の目録掲載の
有無について確認を行った。この目録は、一九八二(昭和五十七)年
五月三十日(日)から六月六日(日)に開催された「巻町が生んだ偉
大な教育者、篤学の人 平野秀吉先生顕彰展」の展示目録である。

(六)の掛軸「ひんか羅となくは何鳥梅のきの 原生林をすきて空二
累」について。

これは『平野秀吉資料目録』の資料名は「ひんからとなくは何鳥一

41 現在は大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館である。
42 国文学研究資料館は古川清彦(専門委員)が担当した(新潟市巻郷土資
料館の資料より)。

〔半切条幅〕であり、目録作成当時の所蔵者は「小泉孝」である。

(七)の掛軸「穂高嶽をよめる歌立にみじか歌」について。

『平野秀吉資料目録』の資料名は「穂高嶽をよめる長歌並短歌〔茶掛条幅〕」であり、目録作成当時の所蔵者は「小泉孝」である。『平野秀吉』の八四頁に「穂高嶽をよめる長歌」の茶掛軸の書」と注を施した、掛軸の写真が掲載されているが、「穂高嶽をよめる長歌」についての釈文や注釈は施されていない。そのため注釈は本編が初出となる。

(八)の掛軸「高ね薔薇美な上む支て日さかりの やま一山をさきみてるかも」について。

『平野秀吉資料目録』の資料名は、「高ね薔薇みな上向きて―〔半切条幅〕」であり、目録作成当時の所蔵者は「計良福松(分水町)」である。計良福松所蔵の掛軸をどうして小泉孝が所持するにいたったのか、今となっては知る由もない。

ここで紹介した三つの遺墨(六)(七)(八)の掛軸)は『平野秀吉資料目録』の掲載資料であり、平野秀吉先生顕彰展で展示された遺墨といえる。そのため平野秀吉先生顕彰展で展示された遺墨二点をここで確認できたことになる。

七. 平野秀吉の落款分類

平野秀吉は文検で国語科のみならず漢学科と習字科にも合格していることから、筆者は平野の書家としての評価はもっと高まつてもよい

と考えている。平野秀吉の遺墨点数は少なく⁴³、平野の書体の特徴を明らかにすることができない状況にあった。本調査研究と既知遺墨の研究成果を総合的に取り扱うことにより、平野秀吉の書体の特徴を明らかにできるとともに、その特徴に基づく落款分類を行うことができるのではないかと考えるようになった。そこで筆者は秀吉の落款「秀」に着目し落款分類を行うことにした。「秀」は「禾」と「乃」からなり、上下2文字のバランスに焦点をあてることで、4つの落款タイプ(「落款タイプI型」)「落款タイプIV型」に分けることができた(表2)。

落款タイプI型について。「秀」について、「禾」と「乃」は等分の大きさで記されるタイプである。遺墨1点が該当する。

落款タイプII型について。「秀」について、「禾」が比較的小さいのに対し、「乃」は左右に大きく広がって記されるタイプである。遺墨2点が該当する。

落款タイプIII型について。「秀」について、「禾」が比較的小さいのに対し、「乃」は上下に長く記されるタイプである。遺墨7点が該当する。遺墨の多くがIII型に分類される。

落款タイプIV型について。「秀」について、「禾」が比較的小さいのに対し、「乃」は上下に長く、丸みを帯びて記されるタイプである。「乃」は平仮名の「の」にみえる点の特徴といえる。遺墨3点が該当する。3点すべて短冊である。

これまで述べてきたように平野秀吉の落款は、4つのタイプに分類できるとともに、落款タイプIII型は調査遺墨(掛軸、料紙、短冊)13点のうち7点を占めること(優占割合54%)が明らかとなった。

43 同7。

八・後記

本調査研究は小泉孝の親族から資料提供を受けたことに端を発する。小泉孝旧蔵の、平野秀吉の遺墨調査の機会を頂いたことに心から感謝するとともに、小泉孝が平野秀吉の遺稿等の差配について大きな役割を果たしていたことも明らかにすることができた。平野秀吉研究の第一人者として知られている小泉孝は、教育者としての多くの業績を残し、新潟県教育委員会ならびに新潟県知事表彰や叙勲を受けていた。小泉孝は「一九九二（平成四）年十一月二十二日、東京都にて」⁴⁴ 逝去、同年「十一月二十三日文京区真珠院」で執り行われ⁴⁵、墓は「真珠院（東京都文京区小石川三丁目）」にある⁴⁶。小泉孝は小和田毅夫⁴⁷と親しい間柄で、両者とも高田市教育委員長、高田文化協会会長に時期を異に就任するなど、公私にわたる交流があつたことを親族から教えていただいた。両者の交流は今後の調査に期待したい。

最後に遺墨の釈文は新潟県立長岡農業高等学校教諭の金子達雄先生のご協力を頂いた。また明星大学准教授の廣嶋龍太郎先生には私の拙い文章を読み、懇切なるご教示を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

⁴⁴ 村山和夫「じょうえつ余話 第十二話 小泉先生の眠る小石川真珠院界

わこ」、高田文化協会『文芸たかだ 第一〇九号』高田文化協会、1994、p.60。

⁴⁵ 前掲22、p.37。

⁴⁶ 同44。

⁴⁷ 雅子皇后の祖父。

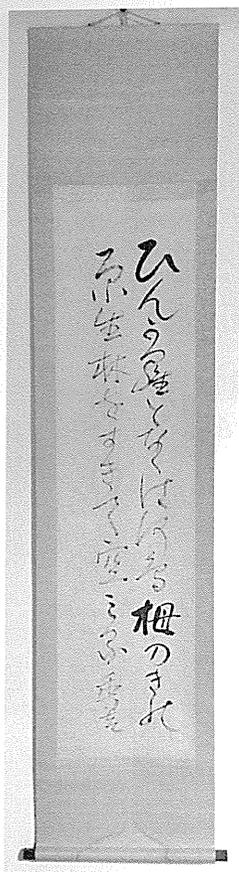


図1. 掛軸130×31(本紙)

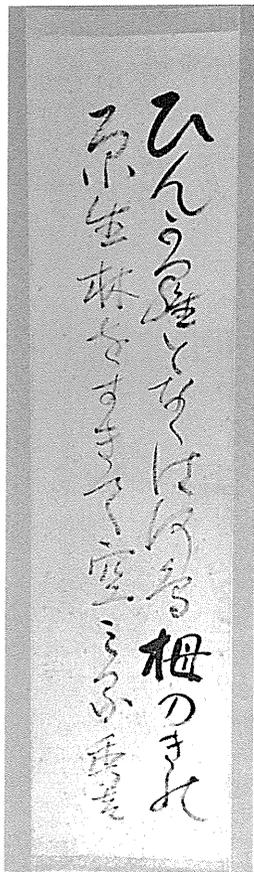


図2. 図1拡大図

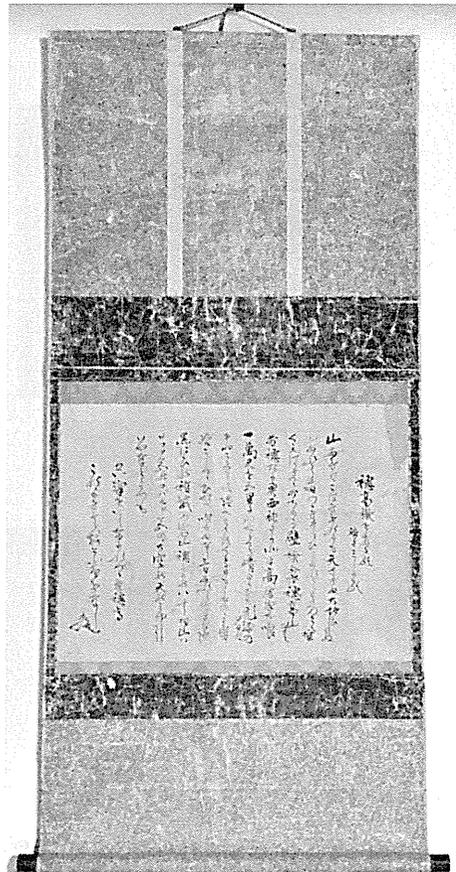


図3. 掛軸35×48(本紙)

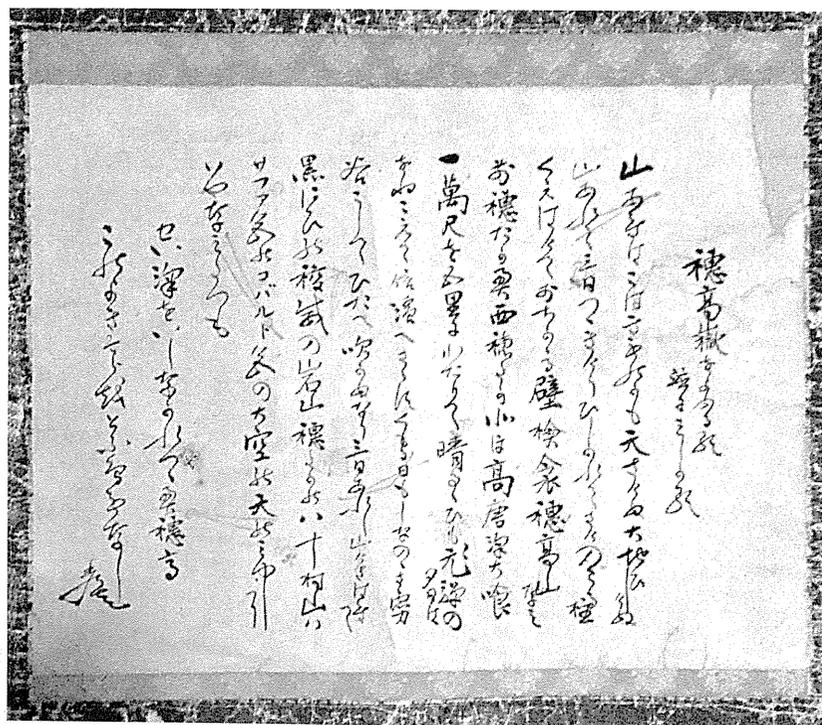


図4. 図3拡大図

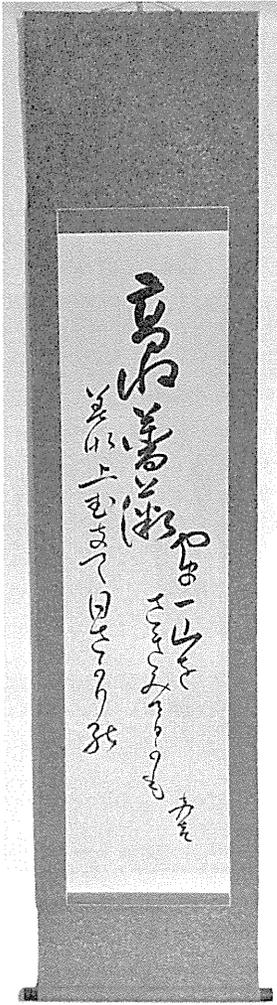


図5. 掛軸135×32 (本紙)

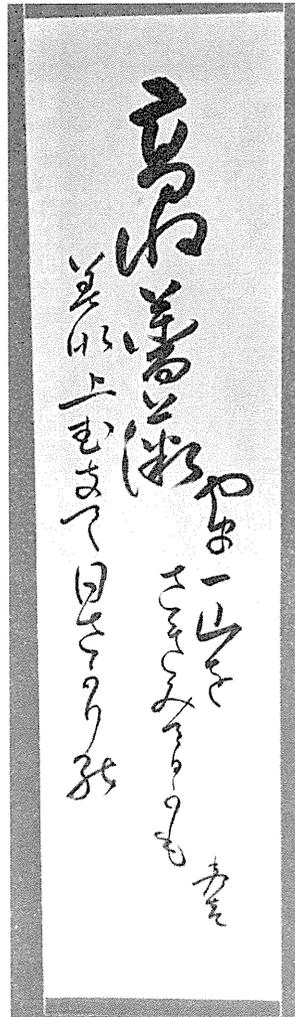


図6. 図5拡大図

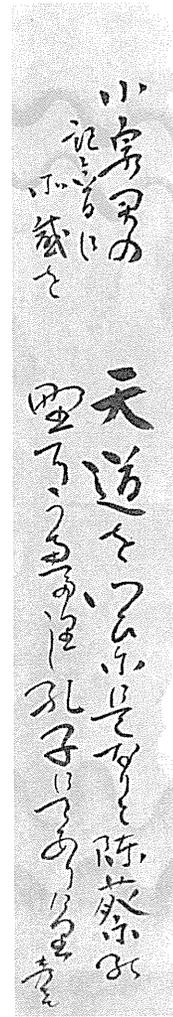


図7. 短冊35.5×6

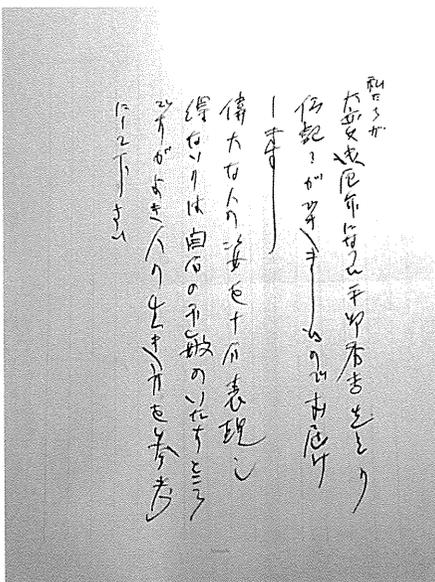


図8. 手紙23×17.7 (便せん)

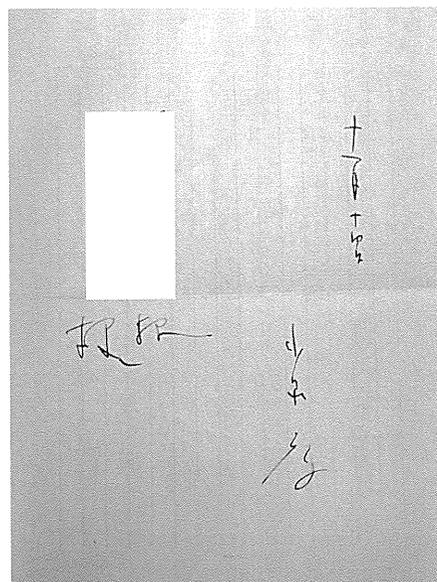


図9. 手紙23×17.7 (便せん)

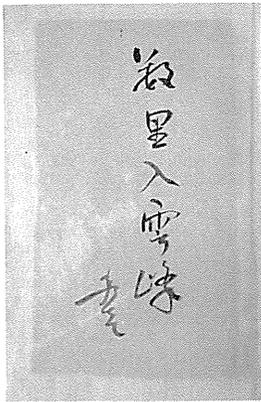


図10. 『高嶺いばら』18×13

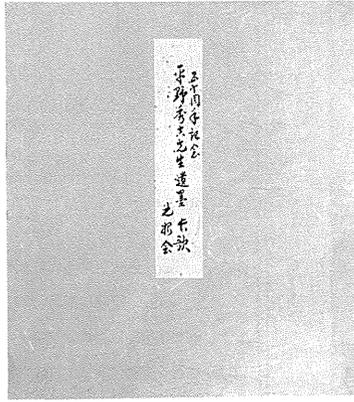


図11. 色紙入れ28×25

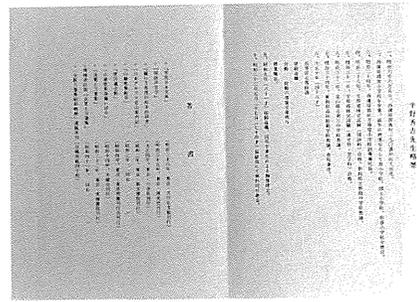


図12. 平野秀吉の履歴20×30

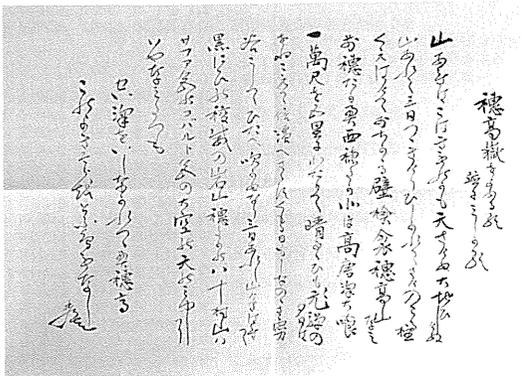


図13. 複写紙本35×52

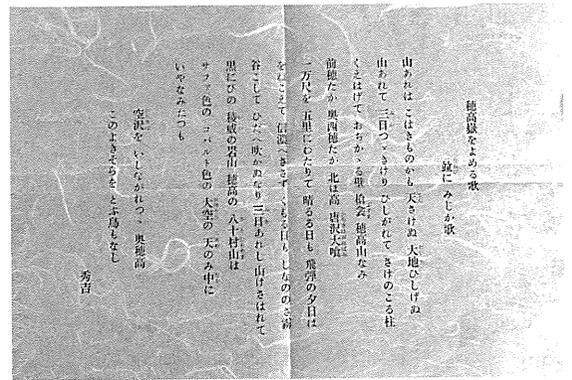


図14. 釈文解説紙25×36

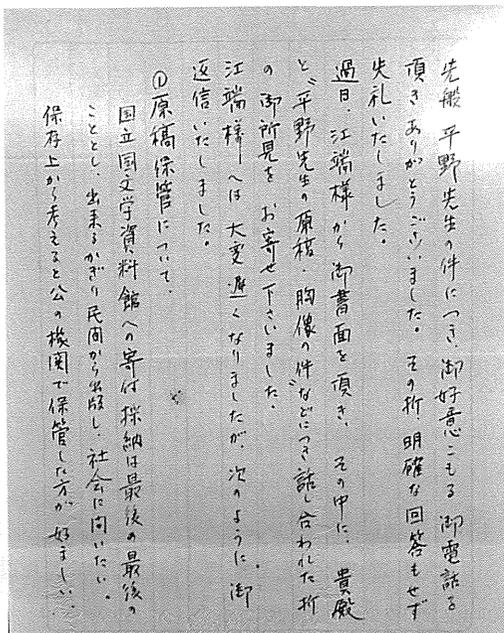


図15. 手紙23×17.7 (便せん)

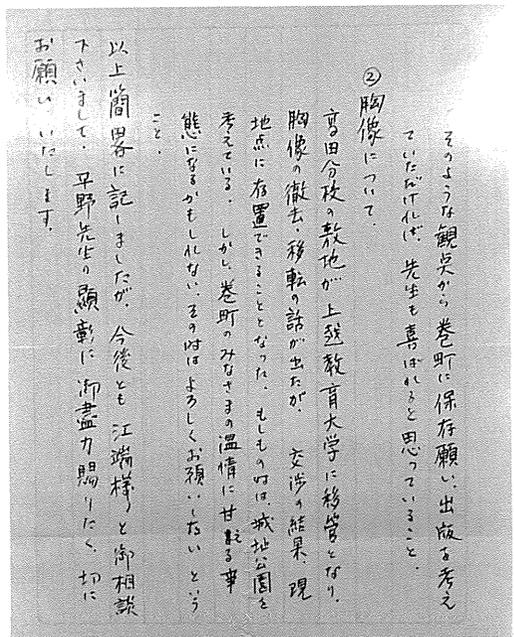


図16. 手紙23×17.7 (便せん)

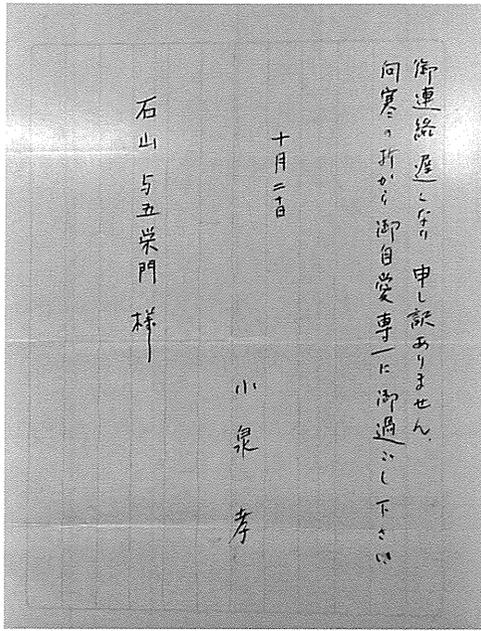


図17. 手紙23×17.7 (便せん)

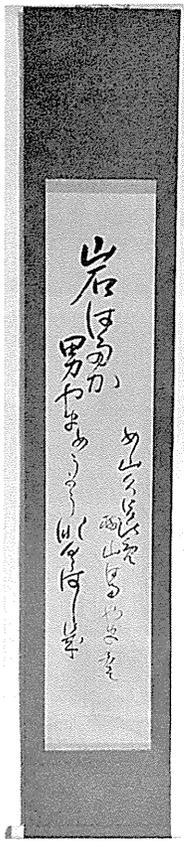


図18. 掛軸128×25 (本紙)

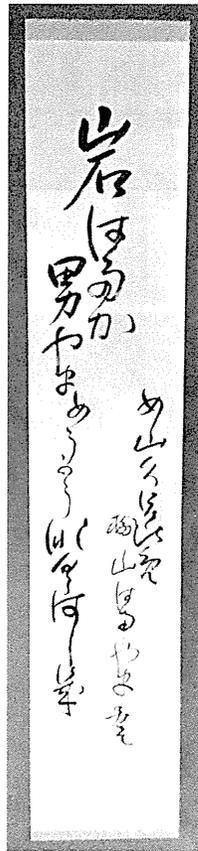


図19. 図18拡大図



図20. 蓋天板



図21. 蓋裏面

収納箱43.5×8.0×7.5

図は、令和2年8月7日(金) 横田撮影。
同日サイズ計測。単位はcm。

表1. 小泉孝の新潟県知事表彰のための推薦書類（履歴書・身分調書・功績調書）

履歴書	
本籍地 現住所	新潟県上越市大町2丁目99番地の1 新潟県上越市大町2丁目3番34号
氏名	小泉 孝
生年月日	明治42（1909）年1月24日生 （66才）〔1〕
学歴	昭和3（1928）年3月25日 高田師範学校 本科一部卒業 昭和7（1932）年3月25日 高田師範学校 専攻科卒業
職歴	（1）該当条項に関する履歴 自昭和3（1928）年3月31日 三島郡寺泊町尋常高等小学校訓導 至昭和6（1931）年3月30日 自昭和4（1929）年8月31日 至昭和6（1931）年3月30日 三島郡寺泊町青年訓練所指導員（嘱託） 自昭和7（1932）年3月31日 至昭和21（1946）年3月14日 中頸城郡津有村戸野目尋常高等小学校訓導 自昭和7（1932）年3月31日 至昭和13（1938）年3月31日 中頸城郡津有村戸野目農業補習学校助教諭（兼任） 自昭和13（1938）年3月31日 至昭和22（1947）年4月30日 中頸城郡津有村戸野目青年学校教諭 自昭和21（1946）年3月15日 至昭和24（1949）年3月31日 中頸城郡津有村戸野目国民学校教頭 自昭和24（1949）年3月31日 至昭和27（1952）年10月30日 東頸城郡沖見村沖見小学校校長 自昭和27（1952）年11月1日 至昭和31（1956）年6月30日 文部教官採用（新潟大学教育学部附属高田小学校教諭） 自昭和31（1956）年7月1日 至昭和36（1961）年3月31日 新潟県教育委員会指導主事 ・新潟県教育委員会上越出張所西頭分室主任主事 ・新潟県教育委員会上越出張所指導主事 ・新潟県教育庁学校教育課指導主事 自昭和36（1961）年4月1日 至昭和40（1965）年3月31日 高田市立大手町小学校校長 自昭和40（1965）年4月1日 自昭和42（1967）年3月31日 高田市立大町小学校校長 自昭和39（1964）年4月1日 至昭和42（1967）年3月31日 高田市社会教育委員 自昭和40（1965）年4月1日 至昭和41（1966）年3月31日 新潟県社会教育委員 自昭和44（1969）年10月1日 至昭和45（1970）年10月11日 高田市教育委員 自昭和45（1970）年10月11日 至昭和46（1971）年4月29日 高田市教育委員長 自昭和46（1971）年4月29日 至昭和47（1972）年7月27日 上越市教育委員 自昭和47（1972）年7月27日 至昭和47（1972）年10月12日 上越市教育委員長 （2）その他の履歴 自昭和38（1963）年5月 至昭和40（1965）年4月 上越文化協会会員 自昭和40（1965）年5月 至昭和45（1970）年4月 上越文化協会常任理事 自昭和45（1970）年5月 至昭和50（1975）年11月 上越文化協会会長
身分調書	
本籍地 現住所	新潟県上越市大町2丁目99番地の1 新潟県上越市大町2丁目3番34号
氏名	小泉 孝
生年月日	明治42（1909）年1月24日生
1 改氏名その他身分移動事項	
2 禁治産、準禁治産、破産宣告の有無	
3 刑罰の有無（道路交通法関係を含む。）	
上記のとおり相違ありません。	

功績調書	
本籍地 現住所	新潟県上越市大町2丁目99番地の1 新潟県上越市大町2丁目3番34号
氏名	小泉 孝
生年月日	明治42（1909）年1月24日生 （66才）
1 該当条項	新潟県ほう賞規則第2条第4号〔2〕
2 性別	日常、自己に対しては教師としての厳しさをもちながら、生来の温順さと、他に対する豊かな包容力によって、多くの人々の敬慕をあつめている。 教育一筋に生きる盛んな情熱は、その研究の深さ、質の高さと共に、周囲に大きな影響を与えたものであった。 また、常にどんな新たな感覚をもって教育の動向を考究し、全職員それぞれの場において、地域教育界に様々な教育研究会や協議会を組織し、その推進の中核として活躍した。
3 功績内容	（1）該当条項に関する功績 小学校訓導としての功績 ○校長の学校経営に積極的に協力し、児童生徒の体育活動及び健康活動を学校の中核となって推進した。

その旺盛な研究意欲とたしかな実践力による数々の実績は、中頸城郡津有村戸野目校に健康教育文部大臣表彰をもたらし、昭和11（1936）年11月、校長と共にその推進者として表彰式列席の栄に浴した。

また、その教育論文も全国的に認められ、昭和12（1937）年、小学館記念事業としての募集論文「児童の健康教育について」は全国一等賞を受賞した。さらに、昭和14（1939）年文部省精神文化研究所の教育論文募集にも応募し、「時局下における国民的位向上の方策」の論題で、同じく全国一等賞を受賞した。そのほか、積極的に著書研究実践は、広く地域教育界に影響を与え、その指標となった。

○上記実践による健康教育の重要性を、より広い地域にと考え、学童予防衛生生に対する地域的取り組みを期して、上越学童予防衛生研究会を組織し、幹事として活躍した。殊に、昭和16（1941）年～22（1947）年、幹事長の重責にあつては、国立予防研究所長 柳沢博士の協力を得て、全国初の事業としての地域各校学童対象による結核予防BCG接種を継続実施した。そのめざましい成果は、厚生省の認めるところとなり、健康優良学校賞として厚生大臣賞を受賞した。これらによって、戦後における戸野目校の健康教育全国特選校選定の基礎を固めた。

○戦前の学校教育において、既に視聴覚教育の重要性を察知し、県下初の映写機購入に努力するなど、県下教育界に先がけて視聴覚教育を学校に導入した。しかもその卓越した理論と実践力によって各地に講師として招へいされ、多くの教職員に深い影響を与えたことは戦前戦後を通じての上越地方視聴覚教育の振興に貢献し、その基盤を確立することになった。

小学校教頭としての功績

○その教育にかける情熱は、学童にとどまらず、地域の青年、父母をも動かし、昭和10（1935）～23（1948）年にかけて、中頸城郡津有村の全村教育及びコミュニティスクールとしての教育活動を呼びおこした。その全村教育による成果は全国的に認められたところとなり、地域の人々の学校への信頼を深めた。

○訓導及び戦時時代を通じ、学校保健と健康教育、視聴覚教育、全村教育の深い研究実践で挙げた成果は県下教育界屈指の存在としての名声を得、その業績は、長く地域の教育実践推進の基盤としての役割りを果たした。

へき地校長としての功績

○教育思潮が激しくゆれ動く昭和24（1949）年、東頸城郡のへき地校に新任校長を拝命し、「みずから学習をすすめる子ども」を目標として、児童の勤労を主体とし、そこからの学びとりを重視する教育活動を組織した。その勤労活動の成果として得た資金をもとにして、当時の県下には稀な学校図書館をへき地校に設置した。

また、その学校経営の成果を職員と共にまとめ「沖見のこども」「山なか田たごころ」などの副読本を出版し、郷土学習のあり方を研究するなど、そのまな新著書な経営によってへき地各校に大きな刺激を与えた。

○さらに、戸野目校時代に培った識見と実績を生かし、東頸城郡町村学校保健会の組織と、教科視聴覚研究会の創設にあたり、なお牧村フィルムライブラリーの設立に努めるなど、地域の教育力を高めるためのめざましい活躍をした。

○また、変動期におけるカリキュラム作りの重要性に着目し、東頸城郡教育研究会の組織確立に努めて、自ら新カリキュラムを作成主任となり、その組織を動員して全教科に亘る指導計画を完成するなど、へき地教育の振興に大きな足跡を残した。

県指導主事としての功績

○改訂指導要領の完全実施を目指す時期にあたり、国及び県の方針を体してその円滑な施行に力を発揮し、すぐれた実績を残した。

上越中学校校長としての功績

○卓越した研究の組織力を遺憾なく発揮し、一貫して地域全体の教育高上に尽力した。例えば、県下教育界の先達として、学校に教育機器を大量導入し、学習指導改善のための研究実践を深め、その成果を地域に広げて研究組織を固め、教育の現代化への基礎づくりに努めた。

また、上越国語教育連絡協議会の創設に努力し、昭和41（1966）年、42（1967）年会長を務める中で、各市区及び全国との研究の交流と研究発表会を推進し、実践記録集や作文ノートの作成などの活発な事業をおこした。

殊に、直接現場に生きる、各文部ノートの完成は、全国的に国語研究者の好評を得た。一方、上越国語同好会の創設にも力を尽し、大学教官による専門的講義と現場実践の交流を図るなど、理論と実践の統一を求めてリーダーとしての情熱を傾けた。その成果は、現在もなお、地域の現場に生きている。

○さらに、全国音楽教育研究会、図書館教育研究会、作文教育研究会などを次々と開催し、常に全職員と地域の研究の組織推進に努め、「創造性を培う知的能力の開発」で学研教育を受けるなど、そのすぐれた経営手腕は、広く他の指標と認められた。

この時期には、県小学校長会長、副会長、県小学校教育研究会会長、副会長、全国連合小学校長会理事などの役職を歴任し、県下教育の振興のために活躍した。

○この時期には、県小学校長会長、副会長、県小学校教育研究会会長、副会長、全国連合小学校長会理事などの役職を歴任し、県下教育の振興のために活躍した。

教育委員及び教育委員長としての功績

○高田市の教育委員及び教育委員長としてその職務の遂行にあたり、老朽化した市内各校の校舎改築をすすめ、施設設備の充実にも努めた。また、この間、高田市と直江津市の合併に遭遇して、教育行政の整備に多大の尽力をした。

○殊に両市の合併後、上越市の教育委員長として、学区の再編成や新設校の建設に最大の努力をほらい、教育行政の円滑な運営に貢献するところが大きかった。

上越文化協会会長としての功績

○万葉及び俳句研究を契機として、早くから上越地域の文化活動に関心を寄せ、協力を惜しまなかった。昭和38（1963）年、上越文化協会に加入し、昭和40（1965）年以後その常任理事として活躍した。

○殊に、昭和45（1970）年会長に就任して以来、文学関係にとどまらず、上越地域の文化に関係した様々な顕彰碑の建立展覧会の開催、郷土関係作家及び小川未明童話作家との盛んな交流、郷土文芸誌「文芸たかだ」の100号までの発行など、多様な文化的行事の継続開催に努め、郷土文化の向上に多大な貢献をした。

現在もなお、その任にあり、誠実に活躍を続けて、地域住民のあつい信望をうけている。

（2）その他の功績 特になし

4 賞
昭和42（1967）年度 新潟県教育功労者として表彰を受ける。

注
文中の（ ）内の西暦は筆者が加筆したもので原本（写し）には記載がない。原本（写し）の頁右上に「高田 ④ 17」の記載あり。
〔1〕小泉孝の年齢が66才と記されていることから、昭和50（1975）年1月24日から昭和51（1976）年1月23日の間に用いたものと考えられる。
〔2〕新潟県褒賞規則に基づく申請である。

表2. 平野秀吉の遺墨における落款分類

落款タイプ	落款図	資料番号	短歌	落款の特徴	関連落款図	短歌等
I型		(六)	掛軸「ひんか羅となくは何鳥榎のきの 原生林をすきて空三累」	「秀」について、「禾」と「乃」は等分に大きい。	—	—
II型		(七)	掛軸「穂高嶽をよめる歌竝にみじか歌」	「秀」について、「禾」は小さく、「乃」は左右に大きく広がる。		桐箱「榮光帖」(天板裏面) [1]
III型		(八)	掛軸「高ね薔薇美な上む支て日さかりの やま一山をさきみるかも」	「秀」について、「禾」は小さく、「乃」は上下に長い。		短冊「我今し大白連の座にたちて雲ゆきめぐる 祢の九二を見る」 [2]
		(九)	短冊「小泉君の記念日に所感を」			掛軸「ゆくまゝにまがれるままに瀬の音の 日半はなれぬやまちはさびし」 [3]
		—	掛軸「岩は多か男やまめう可う那具はし幾め山久呂比免樹山は南やま」			料紙「黒百合さく鳶山にのこる雪かたの 鳥形をみれば夏たけにけり」 [4]
	—	—	—			掛軸「妙高の残雪を詠める長歌並短歌」 [5]
IV型	—	—	—	「秀」について、「禾」は小さく、「乃」は上下に長く、丸みを帯び、平仮名の「の」に近い。		短冊「どどどどと雪くつれおつるおとのして 大講堂の夜は更けにけり」 [6]
	—	—	—			短冊「くるまより船につみうつす竹のおとの かちかちとなり聲さむきかな」 [7]
	—	—	—			短冊「ゐならひて舞きぬたたむ小おんなのは めきのひひくはるのよい更けぬ」 [8]

引用文献

- [1] 横田善衛「平野秀吉が記した「榮光帖」と『日本アルプス登山案内記』発行に伴う登山家高頭仁兵衛・大平晟・横有恒との交流を明らかにする」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第22号』越佐文人研究会,2019,p.191。
- [2] 横田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第17号』越佐文人研究会,2014,p.52。
[2]は「雲まにめぐる」と釈文したが、「雲ゆきめぐる」が正しい。〔平野秀吉『山岳歌集 駒くさ』斯文書院,1928,p.33〕。
- [3] 横田善衛「平野秀吉の生家および墓の所在と遺墨について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第20号』越佐文人研究会,2017,p.93。
- [4] 同 [3]。
- [5] 同 [3]。
- [6] 同 [3]。
- [7] 同 [3]。
- [8] 同 [3]。